

聖書:使徒の働き15章1～21節

説教:異邦人の救い

はじめに

パウロとバルナバはアンティオキアの教会から派遣され、いまのトルコ共和国にある町々を訪問します。当時、地中海沿岸にはすでに多くのユダヤ人が移り住んでいたため、どこの町に行ってもユダヤ人会堂があります。二人は安息になるとそこに入り、集まってきた人々の前で旧約聖書を開き、エルサレムで十字架の死を遂げられたイエスこそ神が約束された救い主であることを証しし、このイエス・キリストによって信じる者はみな義と認められと語ります。これを聞いて、ある人々は信じましたが、あるユダヤ人たちはパウロとバルナバに反対し、あるときは石打ちにされて殺されかけたことさえありました。そんな目に遭いながらも、救われた人たちが起こされ、町には教会がつくられていきます。建てられたばかりの教会を信仰のしっかりした人たちの中から長老を選び、彼らにゆだねてアンティオキアに戻っていった。それが前回までのあらすじです。

救われた人たちが起こされ、教会が建ち、福音が海外にも宣べ伝えられていった。そこだけ見ればよいことばかりですが、なにしろイエス・キリストによる新しい契約ですから、受けとめる方にもいろいろな混乱が生じてきます。そんなとき、初代教会はどのように対処していったのか。そこから私たちが教えられることは何かを考えていきます。

1 イスラエル人クリスチャン

1) アブラハムの子孫が救われる

そもそもどうしてこのような議論が起こってくるのだろうか。教会が建てられたばかりの最初の頃、使徒たちや弟子たちはみな、救われるのはイスラエル人だけであると考えていました。というのは、旧約聖書にそのようなことが書いてあったわけです。たとえば創世記17章8節。これは神がアブラハムに語って下さった契約のことですが、「わたしは、あなたの寄留の地、カナンを、あなたとあなたの後の子孫に永遠の所有として与える。わたしは彼らの神となる。」

「あなたの子孫」とはだれか。アブラハムからイサクが生まれ、イサクはエサウとヤコブを生みます。弟のヤコブがやがてイスラエルの十二部族のかしらとなる子どもたちを生み、カナンを受け継ぎました。歴史的に見ても救われるのはイス

ラエル人であることは疑いない。このことを徹底的に教え込まれてきていますから、イエス・キリストの救いはイスラエル人だけだと思いついていた。

2) 百人隊長コルネリオが救われる

ところがあるとき事件が起きます。ペテロに聖霊の語りかけがあった。ローマ軍の百人隊長であるコルネリオの家に行きなさいというのです。当時、ユダヤ人が異邦人の家に入って一緒に食事するのは身を汚すことと考えられていましたから、ペテロは恐ろしくて何度も断るのですが、どうしても行けという。それでしかたなく行くわけです。家に入ったペテロは、コルネリオの前で、イエスの死と復活を説明し、「この方を信じる者はだれでもその名によって罪の赦しが受けられる」と語る。そうしたら聖霊がコルネリオの家族全員に注がれ、一家全員救われてしまった。これを見てペテロは確信した。神は、イスラエル人だけではなく異邦人も救おうとされている。でもアブラハム以来二千年間も受け継がれてきた考え方ですから、全員がすぐに受けとめられたわけではない。どうしてもトラブルが起きてしまう。それが今日の箇所の背景にあります。

3) 「異邦人も割礼を受けるべきである」

そのトラブルというのは、あるイスラエル人がペテロたちのいる教会にもやって来て、異邦人も割礼を受けるべきである、と語ったことから始まります。確かに割礼のことは創世記17章11節に書いてあります。「あなたがたは自分の包皮の肉を切り捨てなさい。それが、わたしとあなたがたとの間の契約のしるしとなる。」人はいつ救われるのか。口で告白して主を信じたから救われるのか。いや、割礼を受けなければ本当に救われたとは言えない。聖書にそう書いてある。これがイスラエル人の主張でした。

2 会議

1) 元パリサイ派ユダヤ人の主張

パウロとバルナバはこの意見に反対したのですが、かなり大きな問題なので自分たちだけでは結論を出すのではなく、使徒たちがいるエルサレムに行つて一緒に考えてもらのがよいだろうというこ

とになり、そこでエルサレムで会議が開かれることとなります。そうしますと、そこでも大論争になる。ここでも元パリサイ派の信徒が立ち、パリサイ派の考え方でずっと生活していた人ですから、モーセの律法を守るべきだと主張します。そこへペテロが立ち上がって意見を述べます。

2) ペテロ

彼が最初に語ったことはこうでした。7節。「兄弟たち。ご存じのとおり、神は以前にあなたがたの中から私をお選びになり、異邦人が私の口から福音のことばを聞いて信じるようにされました。」

これはなんのことか。彼は、自分から積極的に異邦人に伝道しようとしたことは一度もなかった。コルネリオの所に行きなさいと言われたときも、最初行きたくなかった。でも主はなぜか自分を選んで行くように言われる。そうしたら何を見たか。異邦人にも聖霊が与えられて救われた。そこでペテロは初めて了解した。「(神は) 私たちと彼らの間に何の差別もつけず、彼らの心を信仰によってよめてくださったのです。」

コルネリオが救われたのはペテロの手柄でも何でもない。神がなされたことだった。ではコルネリオが救われたのはどうしてか。すばらしい行いをしたからか。いや、ただ恵みによって救われた。ペテロは自分の目で見ていたのでそれがよくわかっている。

それなのにどうして、「それだけでは救われない。割礼を受けてモーセの律法を守らなければならない」と言うのか。神がなされたことに不足があるということか。そんなはずはない。

だいたいにして、あなたがたはモーセの律法を守れると言えるのか。自分の胸に手を当てて良く考えなさい。自分が守ることもできなかったのに、ほかの人には守れとどうして言えるのか。これを聞いていた全会衆は黙ってしまう。結構説得力があったわけですね。バルナバとパウロも伝道旅行の中で異邦人が救われていったことを証する。もうこれだけ証拠が集まれば結論は出た、と思うのですがそこでは終わらない。

3) 主の兄弟ヤコブの主張

主の兄弟ヤコブが立って、旧約聖書のみことばを引いて、説明を加えます。16節から18節ですが、これはアモス書9章11, 12節からの引用です。「その後、わたしは倒れているダビデの仮庵を再び建て直す。その廃墟を建て直し、それを堅く建てる。」

ダビデの仮庵とは、イスラエルのことと言っていいでしょう。今は国は滅んでなくなったように見えるけれど、イスラエルは必ず救われていく。これはもっと広い見方をするなら、イスラエル人が救われる、という約束でもあります。17節はこうです。「それは、人々のうちの残りの者と わたしの名で呼ばれるすべての異邦人が、主を求めるようになるためだ。」アモス書の中にも異邦人の救いがきちんと約束されているのではないかと。異邦人は割礼を受ける必要はない。それが旧約聖書から導き出された結論でした。

ちなみに新約聖書ではなんと言っているか。パウロ自身がガラテヤ書3章28, 29節で語っています。「ユダヤ人もギリシア人もなく、奴隷も自由人もなく、男と女もありません。あなたがたはみな、キリスト・イエスにあって一つだからです。あなたがたがキリストのものであれば、アブラハムの子孫であり、約束による相続人なのです。」当然のことですが、旧約も新約も聖書はすべて一致しています。

さて話がそこで終わるのかと思ったら20節がある。「ただ、偶像に備えた汚れたものと、淫らな行いと、絞め殺したものと、血を避けるように、彼らに書き送るべきです。」

先ほども述べたように、イスラエル人は異邦人の家に入らない、まして食事を一緒にするなどでもない。そういう習慣が長く続いてきました。それがあつた日、異邦人も救われましたので教会に加えて下さいということになる。皆さん想像してみてください。どんなことになるか。何しろ異邦人の家に入らないというくらいお互いに習慣が違うわけですから、いろいろな誤解が生じてくる。

例を挙げましょう。モンゴルに行ったとき、ゲルと呼ばれる家に招待されたことがありました。私たちはザックを背負っていましたが、椅子に座ってそれを床に置こうとした。そうすると注意された。「床に置いてはいけません。ひざに載せてください。」床とか地面は汚れた場所。そういう意識が非常に強い。日本人なら、誰かが畳の上を靴を履いて歩こうとしただけでびっくりすると思いますが、それに近い感覚だと思います。

イスラエル人と異邦人の間も同じです。20節に書いてあることは、当時異邦人の間では普通の習慣として行われていたのだそうです。でも、イスラエル人にはとても理解できない。それで、やはりお互いの平和のために、そこだけは配慮してください、そのような意味としてヤコブが付け加えたものでした。

3 救い

1) 行いではなく、恵みによって

今日ここから二つのことを教えられます。一つ目は11節です。「私たちは、主イエスの恵みによって救われると信じていますが、あの人たちも同じなのです。」

恵みによって救われる。何度も聞いていて頭では理解しているつもりです。しかし、これが実際となると実に難しい。既に救われた方はこんなことを考えたことはなかったですか。「救われたことを神に感謝するために私たちは何ができるだろうか。教会でもっと奉仕をし、聖書を読み、祈り、いろいろな人に関わり、伝道していくべきだ。」もちろんそのとおりで、素晴らしいことです。しかし、これが行きすぎることがある。奉仕をしないと神にきらわれるのではないかと強迫観念がわいてくることもある。バランスを欠いています。いつの間にかパリサイ人になってしまう。

恵みによって救われる。救われたから、後から一生懸命お返しをしなければと考える必要はない。こんなことを言うと誤解されますので、一言付け加えておきます。何もするなとか、何もしなくてよい、と言っているのではありません。心の中から喜びがあふれ出てきたら、そのときすればよい。したいと言いうのをだれも止めることができません。それこそが神の恵みなのです。

2) 聖書から確認していく

二つ目のこと。初代教会は問題を解決するために話し合いをします。いろいろな人が自分の体験を語り、神の恵みを証しました。しかし、ヤコブは念押しするように、本当にそれは神から来ているのか聖書を調べた。これは大切な原則だろうと思います。

私たちのこの教会の中で大きな問題が起きることがあるでしょう。そんなとき、牧師が決めたことに従いなさい、ではない。疑問があるのなら、それぞれの経験からご自分の意見を述べてよい。でもそこで大切なのは、「世の中がこうしているから」とか「会社ではこうしている」が判断基準とはならない。元パリサイ派のユダヤ人は、自分がかつて属していた組織の基準を持ちだしてきました。でも、最終的には聖書のみことばが何を語っているか。ひとつひとつ確認していくわけです。

どうして聖書なのか。聖書はなんですか。いのちのみことばです。いまから四千年前、アブラハムを通して結んでくださった救いの約束でした。人がど

んなに罪を犯して神に背こうとも、神の約束の計画は何一つ変わらない。約束のとおり二千年前、神の子であるイエス・キリストが人となって来られ、私たちの罪を背負われた十字架で死なれ、三日目に墓の中からよみがえり、この方を信じる者を罪を赦され、永遠のいのちをいただき、神の国に招かれて行く。そのことをはっきりと書いてある。それが聖書です。

モーセの律法を何一つ満足に守ることができない、そんな私たちに差別することなく救いを与えてくださる。主の御名をあがめたいと思います。